

氏名(本籍)	三 政 洋 一 (岡 山 県)
学位の種類	博 士 (芸 術 学)
学位記番号	博 甲 第 6200 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	彫刻家 吉田三郎の研究 - 官展出品作を中心に -

主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	守屋正彦
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	中村義孝
副査	筑波大学教授		柴田良貴
副査	田園調布学園大学講師	博士(芸術学)	中原篤徳

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

### (目的)

彫刻家の吉田三郎(1889 - 1962)は、1907(明治40)年の文部省第四回美術展覧会に初入選して以降、戦後、法人化された日本美術展覧会へと至るまで官展を中心に活動した。これまでの近代日本彫刻史では、吉田三郎に着目し、積極的に位置付けようとする研究は行われてこなかったが、近年、再評価された観があり、石川県立美術館において2001(平成13)年に、「彫刻家 吉田三郎」が開催され、2009(平成21)年にも、「石川近代彫刻の巨匠 吉田三郎のあゆみ ～ふるさととの繋がりを併せて」を開催している。しかしながら、従来の研究は断片的な紹介に留まっており、網羅的に作品を検討し吉田の彫刻上の考えについて考察された解釈が充分に行われたとは言い難い。本論は、これまでの研究を土台としながら、実制作者としての観点から、吉田三郎の彫刻作品の表現技法を入念に検討し、吉田の彫刻上の考えを改めて解釈することを目的としている。

### (対象と方法)

本論は、吉田三郎が初入選をした、1907(明治40)年の文部省第四回美術展覧会から、遺作出品された1962(昭和37)年の第四回日本美術展覧会までの官展出品作を中心に考察した。吉田三郎の作家活動を包括的に捉え、展覧会以外の活動についても検討し、それぞれの作品における制作意図と、表現の変遷を有機的に捉えようとしている。

その方法として、本論を5章で構成し、第1章では、吉田が1919(大正8)年に開催された帝国美術院第一回美術展覧会で、特選を受賞した《老坑夫》までを修行期と捉え論述した。1907(明治40)年の文展の開催によって、彫刻という表現技法は純正美術として確立されていくが、そうした近代化が進む以前の少年期に、生涯の師である板谷波山(1872-1963)と青木外吉(1877-1958)から受けた教育の内容について確認した。また、《老坑夫》に関する評価として、従来の研究では、近代日本彫刻史に大きな影響を与えたオーギュスト・ロダン(フランス August・Rodin 1840-1910)と、ロダンとほぼ同時期に日本で紹介された、コンスタンタン・ムーニエ(ベルギー Constantin Meunier 1831-1905)の影響が指摘されているが、具体的な影響

の内容について十分に考えられた研究は行われていないため、1910（明治43）年の第四回文展から第一回帝展までの官展出品作を検討し、吉田におけるロダンとムーニエの初期受容を考察した。第2章では、吉田が帝国美術院に属する作家として活動した期間を取り上げた。大正後期に入ると、作家による研究団体の結成が顕著に見られるが、吉田は1919（大正8）年に「東台彫塑会」、1923（大正12）年に「白日会」と、美術史上に残る団体の結成に中心となって参画した。特に「東台彫塑会」は、官展の中心的存在であった朝倉文夫（1883-1964）をリーダーとした彫刻家のみによる団体であったため、吉田における朝倉の影響について文献をもとに考察した。そして、これらの諸団体での活動と相関する帝展出品作について、1920（大正9）年の第二回帝展から1931（昭和6）年の第十二回帝展までの作品から検討している。吉田は1931（昭和6）年から文部省在外研究員として、約一年間、渡欧しており、これについて知られてはいたものの、具体的な動向は十分に検討されてこなかったため、第3章では、吉田の海外研修について単独で採り上げた。諸資料から、吉田の渡欧時における動向を整理して研究の基礎固めを行い、帰国後の1932（昭和7）年の第十三回帝展から1934（昭和9）年の第十五回帝展までの出品作を追い、海外研修の成果について考察した。次いで、第4章では、戦時下における吉田の活動と作品について論じた。1937（昭和12）年の日中戦争勃発から終戦まで、わが国は戦時体制へと突入したが、吉田は陸軍美術協会の囑託として戦争美術に関わる展覧会へ出品しているため、そうした時制下における活動を検討した後、1935（昭和10）年の帝展改組後の昭和十一年文展から1943（昭和18）年の第六回文展（通称、新文展）までの作品を追っている。そして、第5章では、戦後の活動に関して、石川県立美術館が所蔵する戦後の日展に出品した作品に併せ、遺族の元に現存する遺品・資料を中心に、その表現技法を分析し、造形上の特徴について論じた。

#### （結果）

筆者は吉田三郎における彫刻上の考えと表現技法について、生涯を五つに区分し、それぞれの時代における動向を通して解釈している。吉田の作品の傾向として、文展初期の頃から抒情を表出する意図が見てとれることに着目し、そうした吉田の思念はロダンやムーニエの影響を受けることで、社会に目を向けさせ、内面に生じる情景を表しながら彫刻性を追求したと解釈している。また、筆者は、吉田の人体造形の特徴として、初期の頃からメリハリを付けた肉付けによって人体の構造を表出することを主眼としているが、年輪を重ねた男性像を繰り返し制作することで自身の作境を見出したと結論付けた。

#### （考察）

筆者は吉田三郎の彫刻上の考えについて、初期の作品の頃から抒情を表出する意図が見てとれることを指摘し、ロダンの作品に見られる身体による心情の表出や、ムーニエの労働者に対する視点に共感しながら、彼らの造形を学び、思想を形として表すために主題に立脚しながら彫刻性を追求していったと解釈している。本論では吉田三郎の彫刻上の考えと表現技法について言及したが、吉田の後進に対する造形上の影響について、未だ不明な点も多い為、制作者として自身の表現に還元するためにも、吉田の内弟子などの後進の作品について、調査・研究が必要であることを今後の課題としている。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

従来の近代日本彫刻史の形成は、専ら彫刻性のみを強調してきた観があり、特に、昭和以降の日本の彫刻界は、ブールデル、マイヨールといったロダン以後の作家に学んだ人々が在野系の団体で彫刻性を追求し、官展系の作家に見られる主題の強い作風は等閑視されてきた。このことは、吉田三郎の代表作である《老坑夫》が大正期を代表する作品と称されることから明らかであろう。そのため、従来の研究では、吉田の大正期における帝展作家としての活動については言及されるものの、吉田の作品を網羅的に扱い、彼の彫刻上の考えについて検討された研究は行われてこなかった。筆者は自身が人体像を制作する作家であることから、

吉田三郎の表現技法に興味を持ったが、今日的な彫刻観から、吉田の作品における彫刻性のみを抽出して位置付けるのではなく、各時代の動向を通して、吉田の彫刻上の考えを解釈しようとしている。

第1章では、石川県での少年期について、吉田が生涯の師として慕う、近代陶芸の先駆者である板谷波山と、当代における塑造芸術の興隆に寄与した青木外吉から受けた教育について、資料を基に具体的な内容を検証し、その影響を確認した。そして、第一回帝展までの官展出品作について、吉田におけるロダンとムーニエの影響に着目しながら、写真と論評から検討し、吉田の周辺との相互影響と吉田自身の制作過程における言及を確認することで、ロダンからは主として肉付けなどの造形的な面であり、ムーニエからは主題の面であったと解釈している。

第2章では吉田が帝国美術院に属する作家として活動した時期を《老坑夫》以後として捉え論述し、帝展作家の一人として結成した研究団体での動向を追いながら、特に、朝倉文夫との関わりについて、資料を基に検討し、人体造形の基礎を重視する朝倉の教育観に同調する吉田の考えを論じた。そして、《老坑夫》以後の帝展出品作を追い、ロダンの作品に影響を受けながら、身体の動きによって彫像に象徴性を持たせようとしていることを指摘するとともに、再び炭鉱労働者の生活情景を主題としながら、四肢を空間に広げ関連付けていく、表現の変化について論じている。

第3章では、吉田の海外研修について現存する諸資料から検討したが、「渡欧日記」から、フランス、イタリアと西欧彫刻の歴史の深さを痛感することで、吉田が日本彫刻の古典へ回帰する意識を持ったことを確認した。帰国後に見られる作品が、身体に統一感が生まれる動体によるポーズであることや、筋肉の明確な表現が見られることから、これを、ロダンやミケランジェロの作品などを実見したことから示唆を受け、鎌倉期の奈良仏師による仁王像などと直結させる古典回帰であったと位置付けるとともに、空間に人体各部位を関連付けていく彫刻表現の変化を指摘して、渡欧による収穫と捉えている。

また、第4章では、日中戦争から終戦までの活動を追ったが、従来の研究では、ほとんど言及されてこなかった戦争美術に関わる展覧会を中心に吉田の戦時下の動向を追い、帝展改組から終戦までの官展出品作を検討した。作品の主題が徐々に静的な情景へと移行し、第六回新文展で再び老人を主題とした《山羊を飼う老人》(原題、羊を飼う老人)を制作したが、同作に見る牧歌的な情景は、戦時下における展覧会で出品した支那や満州の民衆を表した作品と共通性が見られるため、そうした時代背景を指摘し、老人と二匹の山羊の体軀の突出させた骨格を、線と面によって繋ぐことで空間における関連性が生じていることを指摘している。

そして第5章では、遺族の元に現存する肖像彫刻を中心とした石膏像を採り上げ、戦前、戦後を通して吉田が多く制作した銅像として設置された肖像彫刻の表現技法について考えた後、石川県立美術館が蔵する戦後の作品を中心に、日展出品作の変遷を追った。老人を主題とした作品を連作しながら骨格を意図的に関連付けることによって空間が構成されていることを指摘し、線と面による構成要素を抽出して、人体の輪郭を単純化させた表現へ至ったと解釈するとともに、晩年の友人・知人をモデルにした肖像制作では、これまでの集成として骨格を強調しながらメリハリの付けた肉付けによって形態が強く表現されていることを述べ、日常生活から題材をとる吉田の一貫した制作のあり方を論じている。

本論文は、これまで積極的に採り上げられることのなかった彫刻家の吉田三郎について、制作者としての視点から、彼の彫刻上の考えと表現技法を総合的に検討しながら独自の解釈を為すとともに、従来の研究では十分な論考が見られなかった点を考察したことで、高く評価できる。

平成24年1月27日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(芸術学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。